

日本語教育における伝統文化をテーマとした 異文化理解プログラム開発の可能性

森川結花

甲南大学 国際交流センター
神戸市東灘区岡本 8-9-1, 658-8501

概要

外国語教育の中で文化を教えることは必須のこととされているが、日本の伝統文化はこれまで日本語教育の素材としては敬遠されがちであった。本研究では伝統文化を通して異文化理解プログラムの開発の可能性を探るため、能楽、茶道の継承者にインタビューを行い、継承者自身が日本語学習者に伝えたいと思っているポイントを聞き出した。そして、日本語教師向けの文化体験型ワークショップを行い、それを通して継承者から伝わるのが日本語学習において異文化理解の一助になることや、伝統文化を学習素材として積極的に取り扱うことの意義を確認した。

キーワード： 伝統文化、継承者、文化体験プログラム、異文化理解

1 はじめに

本稿は甲南大学総合研究所研究チーム「文化の継承と日本語教育」プロジェクトの一環として行った、日本文化継承者への対面インタビュー調査と、日本語教師向けワークショップの実践を報告するものである。

日本が世界の中で最も誇れる魅力の一つに「文化」がある。日本の文化は、日本を世界に向けて発信するプロモーションの手段でもあり、また、海外からの訪日観光客を呼ぶ手堅い観光資源ともなっている。日本の文化の魅力は多くの日本語学習者が日本語学習を始めるきっかけともなっている。世界で日本語を学ぶ学習者の数は2012年には3,985,669人、2015年には3,655,024人にのぼったが（国際交流基金調べ¹）が、その学習目的として「マンガ・アニメ・J-POPが好きだから」「歴史・文化等への関心」が上位にあがってくる²。実際、本稿の筆者が携わっている甲南大学Year-in-Japanプログラム（以下、YiJプログラムと略称する）の参加学生たちの間でも、日本の文化への関心が日本語学習の入り口となったというケースが多い印象である。逆に言えば、日本の文化に魅力がなければ、マイナー言語である日本語を学びたい理由がほぼ失われてしまうかもしれない。

¹ 国際交流基金(2013)(2016)の調査結果による

² 国際交流基金(2013)によると、日本語学習の目的として最も多くの機関が挙げたのは「日本語そのものへの興味」(62.2%)。次いで「日本語でのコミュニケーション」(55.5%)、「マンガ・アニメ・J-POP等が好きだから」(54.0%)、「歴史・文学等への関心」(49.7%)となっている。

では、学習の入り口段階で学習者の心をつかんだ日本の文化を、日本語学習のプロセスの中で学習対象として、あるいは内容として、教材として、どのように扱っていけばいいだろうか？本研究の出発点はこの問いから始まる。

日本文化体験プログラムは、学習者獲得あるいはプログラム中の学習者へのサービス（気分転換やリクリエーションとして）としてほとんどの日本語教育機関でなされている。各機関によって意識や取り組み方に差はあっても、まったく文化を無視しているということはないだろう。しかし、文化に関して決して専門家ではない（あるいはただの素人でしかない）日本語教師にとって、授業の中で「文化」をどう扱ってよいものか悩ましいところであるというのが現状ではないだろうか。筆者も日本文化体験プログラムが表面的な、ただ単に楽しいだけのリクリエーションに終わらせるのが実にもったいなく残念に感じてきた。そして、日本に来ている留学生が、日本という本場でこそ経験できる伝統文化に触れ、それを深い日本文化理解につなげ、上級、超級話者への階段を登って行けるような学習プログラムの開発の必要性を認識していた。

そこで、本研究では、伝統文化の継承者である能楽師・上田宜照氏³、茶道家・福田竹弍氏⁴の協力を仰ぎ、伝統文化に正面から取り組む日本語学習カリキュラムの構築を目指して、実験的に文化体験型ワークショッププログラムを開発し、実際に運営してみて参加者の反応からその有効性を探ることとした。研究期間は2年を予定しており、1年めの2018年度は準備段階として研究協力者とともにワークショップの内容を考案するとともに、教師向けワークショップを開催してワークショップ参加者からの感想を集めた。2年めの2019年度は、1年めの成果を踏まえ学習者を対象としたワークショップを開催する予定である。この稿では研究1年めの実践について報告する。

2 言語教育における文化

言語（外国語）教育において、「ことばと文化とは切り離せない」ということは常識となっている。たとえば American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) が 1999 年に打ち出した『外国語学習スタンダードズ』“Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century”において、外国語学習の目標領域を Communication, Cultures, Connections, Comparisons, Communities, その頭文字をとって 5C としているが、5本の柱のうちの 하나가 Cultures, すなわち異文化理解である。

ここで言われている Cultures について詳しく確認しておきたい。以下、『外国語学習スタンダードズ』の該当箇所とそれに対する日本語訳⁵を引用する。

CULTURES

Gain Knowledge and Understanding of Other Cultures

Standard 2.1 Students demonstrate an understanding of the relationship between the practices and perspectives of the culture studied.

Standard 2.2 Students demonstrate an understanding of the relationship between the products and perspectives of the culture studied.

³ 上田宜照（うえだよしてる）：能楽観世流シテ方。1988年生まれ。

⁴ 福田竹弍（ふくだちくいつ）：古儀茶道藪内流随竹庵七世。1988年生まれ。

⁵ 翻訳は国際交流基金日本語国際センター（2002）が発行した日本語版、翻訳者：聖田京子によるものである。

文化 (Cultures)

他の国の文化に関する知識と理解を深める

スタンダード 2.1: 他の国の人々の習慣・慣習 (practices) を学び、その背景 (perspectives) について理解する。スタンダード 2.2: 文化的所産・産物 (products) とその背景 (perspectives) について理解する。

本研究が対象とする日本の伝統文化は Products すなわち文化的所産・産物に相当する。また、伝統文化は外国語教育において言われる “Big C” culture (フォーマル) すなわち「社会的・政治的・経済的な施設に関する知識や、歴史的な重要人物、そしてエリート文化として考慮されている文学や芸術⁶⁾」に属するものであり、“little c” culture (日常生活) すなわち「社会学者や文化人類学者によって研究される、衣食住や移動方法、そしてその文化のメンバーが必要かつ適切と考える行動様式等の日常生活に関わるもの⁷⁾」と対照的にとらえられるものである。

ここで、本研究は “Big C” culture と “little c” culture について、母語話者にとってどのように感じられるものであるか? という観点から両者を対比させてみたい。

ある言語の話者にとって、“little c” culture はその言語が使用されている社会の中で、成員間のコミュニケーションの成立を支えているものである。つまり、“little c” culture はその言語社会の中で生きていく上で必須のものであり、必ず獲得しなければならないものである。そして、その獲得は日常生活の中での経験の積み重ねによって可能である。これに対して、“Big C” culture は、一般的な社会人にとっては必ずしも獲得が必須というものでもない。“Big C” culture はいわば趣味の分野に入るものであり、たとえばある文学作品を読んだ経験があるかどうか、または茶道等の素養があるかどうかはある種のステータスになりこそすれ、それがすなわち、その社会で生活していけるかどうかを分けるものではない。また、“Big C” culture が日常生活に密接に織り込まれているということは通常は稀で、その言語の母語話者にとっても “Big C” culture は「異文化」のようなものでありうる。その意味では、母語話者も非母語話者も “Big C” culture を前にしたとき、それほどそれに対する距離感に差があるものではない。多少は母語話者の方がなじみ深いということはあるにせよ、必ずしも母語話者の方が非母語話者よりも優位に立っているともいえず、逆に非母語話者の方が母語話者よりも知識量が多いという逆転現象もありうる。以下、この見解を表にしてみよう。

表1：母語話者にとっての “Big C” culture と “little c” culture

	“Big C” culture	“little c” culture
母語話者にとって	「異文化」でもありうる	自分の文化
日常生活の中に	基本的には「ない」	必ず存在する
その獲得は	必須ではない	必須
獲得する方法	趣味として、日常生活から離れた時空間の中での努力を通して獲得する	日常生活の中での経験を積み重ねていくことで獲得する
獲得したら	ある種のステータスになる	獲得して当たり前

本研究がここで特に強調したいのは、“Big C” culture が母語話者にとっても「異文化」でありうるということが、すなわち、ネイティブの日本語教師であっても日本の伝統文化がまるで外国の文化のような距離感のある「異文化」でありうるということである。この距離感が多くの日本語教師に「私は文化の専門家ではない」「伝統文化のことは分からない」、よって、「日本語授業で伝統文化をどう扱ってよいか分からない」という苦手意識を抱かせ、結果、伝統文化を敬して遠ざけるような姿勢につながっていると考えられる。

⁶⁾ 『外国語学習スタンダード 日本語翻訳版』 p.38 より

⁷⁾ 『外国語学習スタンダード 日本語翻訳版』 p.38 より

さて、そうはいつでも、言語教育と異文化理解が切り離せないという考え方が言語教育の世界の常識になって久しいため、日本語の総合教科書でも文化素材や文化情報の提供が当たり前になっている。それは **Cultural Notes** や文化コラムといった形での「追加情報」扱いの場合もあるが、『上級へのとびら』や『まるごと 日本のことばと文化』シリーズのように、文化を言語と同列の主要級の扱いにして取り上げているものもある⁸。

本研究の取り組みも『上級へのとびら』や『まるごと』の方針に通じるものがあるが、教科書の素材、テーマとして文化を扱うのではなく、「本物」の生きた伝統文化の継承者が講師となる文化体験型ワークショップという無形の学習活動を作り上げようとしているところに違いがある。生きた文化の継承者と時空を共にするワークショップから、学習者は、舞台（動画）を鑑賞したり、あるいは作品を読んだりして感じ取れるもの以上の「何か」を得られるはずである。それを学習者が間違いなく得られるように、かつ、継承者が学習者に伝えよう、伝えたいと思うことが間違いなく伝わるように工夫をするところまで、本研究は責任を持ってワークショップを考案しなければならない。

そのために本研究は、体験型ワークショップのプランニングに先駆けて、上田氏、福田氏に詳細なインタビューを行い、お二人の思いを聞き取った上で、その中から日本語教育に持ち込める話題やアクティビティの可能性を探ってみることにした。次章ではそのインタビューの記録を紹介する。

3 文化の継承者との対話

上田宜照氏、福田竹弑氏へのインタビューは、本稿の著者（森川結花・甲南大学）と共同研究者（永須実香・上智大学）の二人で行った。インタビュー内容はICレコーダーで録音し、永須が書き起こし作業を行った。さまざまに語っていただいた中から、4つのポイントに絞って上田氏、福田氏の思いを抽出してみたい。

1. 能楽／茶道の本質と伝統について、どう考えるか
2. 今の人（あるいは外国人）に何を伝えたいと思っているのか
3. その文化独特の身体感覚についてどう思うか
4. なぜ継承者への道を選んだのか、また、継承者になってどう思っているか

この4点は、上級レベルの日本語学習者を対象とした読解教材もしくは聴解教材を開発すると想定して、内容に抽象性と深みや、学習者に向けての問題提起があること、また、学習者に共感と興味を喚起する要素があることを基準に設定している。

3.1 上田宜照氏の語り（2018年6月25日）

1. 能楽の本質と伝統についてどう考えるか

- 650年間、技法（型）はほとんど変わっていない。それを忠実に守りながらやり続けるのだが、形は一緒だけれど時代とともに思いは変わる。そこで、じゃあ、こういうふうに考えてみたらどうだろうか？と先人と対話をする。形が変わっていないからこそ、先人が何を思って何を考えたかが分かる。でも、私はこう思いますよというのを舞台上で表現する、お客さんに受け取っていただいて、お客さんも成長する、そういう形で心の成長を促す。
- 650年前、命の軽かった時代に、命とは何かを問いかけたのが「能」。今は、日本人とは

⁸ 『上級へのとびら』や『まるごと 日本のことばと文化』シリーズでは伝統文化、伝統芸能、伝統工芸、ポップカルチャーなどを教科書本文の素材として積極的に取り扱っている。

何か？みんなが考えて答えを求めている時代で、精神のあり方、人としてのあり方が問われている。人間全体がそうなのか？と問いかけてくれるのが能なのではないか？

- 能の大切な要素は空間の充実と心の成長。演者が立っているだけで空間が充実する。演者が発信し、観客が受け止める。演者と観客がともに成長させていく。

2. 今の人（外国人）に伝えようとしていることは何か？

- 能というのはこれだけロマンチックなもので、それを先人から受け継いできたものだといいことを伝えたい。
- 限られた表現方法の中で、三間四方の舞台の中で、CGもない時代にどんな工夫をしてきたか。男は女になれないが、女性や人外の者にいかに近づこうとしているか？どう見せようとしているか？を見てほしい。
- 能楽師・上田宜照が能を通して、どういうことを発信したいか、あるいは能に対してどういうことを思っているかを伝えたい。

3. 能楽に独特の身体感覚についてどう思うか

- （すり足もやったことがない人、重心を下げたことがないという人にお茶や能をやっている人はこんな体感をもっているんだということを短い時間で体験してもらえるだろうか）体の動かし方、重心を下につけたままどう動くか、を呼吸法と一緒にするとわかりやすい。
- 能は「立っているだけ」と言われる。立ってるだけの場合もあるが、「空気を止めたまま立つ」ことの大変さはやってみなければ分からない。自分は「空気を止める」「空間を充実させる」というが、体験してほしい。
- 能は身体表現の芸能だと思っている。私たちがどういうふうにして、どういう技術を使って、どういうふうになろうとしているか、ってことを知っていただかないと、能として成立しないと思う。

4. なぜ文化の継承者への道を選んだのか、あるいは継承者になってどうか？

- 2歳の時に初舞台を踏んだ。
- 自分は能楽師なんだと思うことが多い。殻を破ろうとするのだが、なかなかできない。先人もそうだったと思う。表現者として、もっと何かあると思い、ここまでやった、これだけのものを作り上げたと思ったかもしれない。私もその末席に加われたらと思う。

3.2 福田竹弉氏の語り（2018年8月6日）

1. 茶道の本質と伝統についてどう考えるか

- お茶は、出発点、起源をたどろうとすると、どんどんいろんな方向に散らばって行く。いろんな発生源がある。ものを集約したのがお茶で、それがほかの文化とは違うところ。能とは全然ベクトルが違う。
- お茶（という飲み物）はシンプルに、貧しい人から富裕層までが飲んで来た。その中で点前も庶民層と富裕層と、両方から生まれてきた。庶民バージョンはお茶売りのパフォーマンス、富裕層は闘茶から点前が生まれた。そのころのお茶には、今言われている「心を清めるため」などという精神性はなかった。儒教が入ってきて、茶道という「道」になってから精神性が加味された。それまでは「茶道」という言葉すら存在しなかった。
- 千利休が言ったりやっていた「茶の湯」と、今の「茶道」のやっていることは全然違う。千利休は、点前を教える稽古などはやっていなかった。弟子に教えていたのは、世界観をどう考えるか。お茶で自分を表現するということがどういうことかということ、あとは、密会。
- 「茶道」はいわば自分がかっこよく見せるためのもの、セルフブランディングのためのもの。

- 今の茶道に「本質」を極めようとしている人はいない。アニメ、バーチャルリアリティ、幻想空間で遊んでいるだけ、あるいは宗教的に茶道にはまっているとか、そういう人たちに本質を求めても仕方ない。
- しかし、お茶がこれだけ続いてきたというのも事実。でも、時代時代で形を変えながら続いてきている。やっていること、視覚的なことはあんまり変わらない。でもお茶の性格っていうのは、すごくころころ変わりながら、その時代その時代を渡ってきた。今は「茶道ビジネス」=お稽古ビジネスの形で残っている。
- (日本語教師には、お茶を留学生に紹介したいけれど、自分にはそのチャンネルがないと
思っている人がいるはずだ。そういう場合はどうしたらいいか?)
歴史的に見ても、現代までお茶の世界にはプロがいない。ここからが茶の湯でここからが茶の湯ではない、という線引きはない。だから、茶の湯は誰でも自由にやってよい。逆に、茶道はただの茶道でしかない。茶道をやりたければ、茶道そのものをレッスンプロに習うしかない。

2. 今の人(外国人)に伝えようとしていることは何か?

- お茶は、コンプレックスが根源にある「芸術」である。
- 千利休は貧乏な魚問屋の息子、武野紹鷗は落ち武者から皮革商を営んだ父の息子、侘び茶の祖といわれる珠光も家が貧しく、11歳のときに寺に出家させられたと伝えられている。お茶の起源にかかわっている人は何かしら出自のコンプレックスがある。コンプレックスが力になり、自己表現につながり、芸術的に高い世界観になり、それがコンプレックスのない人たちにとっては、ものすごく新鮮で、素敵なもの、かっこいいものに見えてくる。そういうところを振り返るのは心を病む現代人にも参考になるかもしれない。
- いわば、能はクラシックでお茶はジャズ。能は神の世界から降りてくるもので、お茶は日常世界から。能は完成された作品に対して忠実に再現し、依頼に応じて鑑賞してもらうもの。お茶は各々の感性で自己の世界を表現し、人を呼んで鑑賞させるもの(何なら人を呼ばずに自己完結でもよい)。両方の世界観を理解すると日本人の頭の中がとても面白いことがわかる。
- 日常生活がちょっとかっこいい、ちょっとおしゃれになればいい。今の負担をちょっと軽減する。視野を広げる。そういう手段の一つとしてお茶を生活の中に取り入れることはいいことではないかと僕は思う。

3. 茶道の中での身体感覚、身体を使ってすることについてどう思うか

- 僕は点前を大事にしたいと思っている。点前だけは嘘をついていない。お茶の起源の人たちが何考えてたか、どういうこと思ってこんなことをやってたのか、ということに一番近づけるのはもうそこ(「点前」)しかない。だから僕は点前が一番大事だし、あれがお茶の世界では一番芸術的。生身の人間が伝えてきているものなので。だって、あれは無形ですから。
- 「点前は嘘をつかない」というのは、点前はまるで数学の公式のように論理的、かつ無駄がなく合理的に洗練されているからである。それゆえ、点前が途中で変わったことに気が付くこともある。その時は自分の思う通りの点前に変える。ただ、歴史的に「茶道」となる前の時代に正座をしてやっていたことは考えられないので、胡座でどのように点前をしていたのか、というのは僕の研究ポイントのひとつである。

4. なぜ文化の継承者への道を選んだのか、あるいは継承者になってどうか?

- 子供のころ、おじいちゃん⁹の仕事がよくわからなかった。茶会を開くとたくさんの人が来て、ただただお茶の作法でお茶を飲んで、同じようにお菓子を食べて、道具の説明を聞いて

⁹随竹庵六世福田竹有

て、帰る。何が楽しいんだろう？と思っていたが、未だに同じ疑問を持っている。

- 戦略的に、こういった方達を楽しませることはできるし、こういった変化を付ければ他所よりも高評価を得ることができるかも知っている。実際、それを生業として茶会を開いたりしている。しかし、僕自身は茶会に客として参加して、正直「楽しい」という感想を抱いたことは一度もない。
- 現代において「茶道」は、自分が「茶道をしている」ということに優越感を抱く人か、宗教的にはまっている茶道オタク以外には、堅苦しくつまらない、よく分からないものだ。現代こそ、自分が「良い」と思うものを自由に表現し、「自己満足で上等じゃないか」という「茶の湯」の世界観に学ぶべきものは多い。それを広めることにより、現代人が忘れがちな「遊び心」を取り戻させたいと考えている。

3.3 上田氏、福田氏の語りの比較

	能楽師・上田宜照	茶道家・福田竹弼
1. 能楽／茶道の本質について	<ul style="list-style-type: none"> ・650年まえの命の軽かった時代に「命」とは何かを考えたのが能 ・「型」を忠実に守りながら、先人との対話を通して自分の表現を探す 	<ul style="list-style-type: none"> ・「茶道」と「茶の湯」は違う。 ・「茶の湯」はお茶で自分をどう表現するかという世界観を持つ。「茶道」はセルフブランディングのためのもの。
2. 能楽／茶道を通して伝えていきたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた舞台空間と装置、その中でいかに自分の工夫を凝らしているかを見てほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶はコンプレックスが根源にある芸術。コンプレックス→自己表現→芸術的に高い世界観になった。心を病む現代人にとって参考になるのではないか。
3. 身体感覚、身体を使ってすることについて	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸法、重心を下げると言うこと、立っているだけで「空気を止める」「空間を充実させる」こと、これらは実際に体験しないと分からないだろう 	<ul style="list-style-type: none"> ・点前は生身の人間が伝えてきた大切な芸術。点前を通してお茶の起源の人たちに思いを馳せる。 ・「茶道」以前の時代に胡坐でどうやって点前をしていたのかを知りたい。
4. 継承者としての思い	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は能楽師でしかありえない ・先人と同じく、表現者として殻を破り、ついに何かを成し遂げたという思いを自分も得たい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は茶会で楽しいと思ったことは一度もない。 ・「茶の湯」の世界観を広め、現代人が忘れがちな遊び心を取り戻させたい。

上田氏と福田氏の語りの内容を比較すると、総じて上田氏は自分の生業である能楽に対して明るく前向きであり、片や福田氏はお茶（茶道）に対して冷静で批判的である。長年の友人関係にあり、2年前からコラボレーション活動をしている二人にしてこの真逆の違いが生じるところが非常に興味深い。これがすなわち能楽と茶道という二つの芸術の本質的な対照性を表していると考えられるかもしれない。この対照性について福田氏は、「能はクラシックでお茶はジャズ」「能は神の世界から降りてくるもので、お茶は日常生活から」と端的に表現し、「両方の世界観

を理解すると、日本人の頭の中がとても面白いことがわかる」と述べている。「正反対の性質を持つ芸術が一人の人間の中で共存する日本文化とは何か？」という問題提起は日本語教育の中で取り扱っても意義深く、学習者にとっても知的な関心を引き覚ますものになるだろう。

また、上田氏の語りにあった「命の大切さに向き合う」という思想、そして、能楽・茶道ともに自らの身体を使い昔から変わることのない型をなぞることによってする「先人と対話」、これらは「過去の歴史を思い起こすとはどういうことか？」「日本の文化に内包されている平和への思いとは何か」という、大きく深い学習テーマにつながり、日本文化体験学習の目標とも意義づけともなる。言語の習得を目的とした学習プログラムでは平和というコンセプトを目標設定におく発想は出てきにくいだが、文化体験学習ではそれが不自然でなく可能になる。

さらに、上田氏の「先人と対話をしつつ殻を破って新しい時代の自分を表現したい」という思い、福田氏の「自由に自己を表現して新しい世界観を創造する」という見解は、「文化を守り継承するとはどういうことなのか？」という疑問に対する一つの答えとなっているだろう。古いものを守りながら新しいものを創造する、これは日本語学習者が、あるいは外国人が日本を見たときに思う「古いモノと新しいモノが共存する不思議の国ニッポン」の謎を読み解くカギとなるであろう。

以上、本研究が二人の継承者の語りの中から抽出したポイントを、今後、学習者向け日本文化体験プログラムをデザインする際に学習目標として設定し内容を考案していきたいと思う。その際に、継承者の思いが間違いなく学習者に伝わるように、また、学習者自身が体験を通して自ら継承者の思いを感じ取り、日本文化に対する認識を深めていけるようにするにはどのようにプログラム内容をデザインしていけばよいかを考えることが本研究の課題である。

4 日本語教師向けワークショップの実践

本研究は、甲南大学総合研究所からの支援を受けて2018年8月25日と9月8日の二日間にわたって日本語教師向けワークショップを開催した。以下にその実践を記録する。

シリーズ・日本語教師のためのワークショップ：日本文化の理解と継承

	第1回：茶道	第2回：能楽
日時	2018年8月25日（土）13:00～16:00	2018年9月8日（土）13:00～16:00
場所	甲南大学iCommons 茶室	甲南大学iCommons 能楽・歌舞伎練習場
講師	福田竹弑	上田宜照 (ワークショップ実演と補助：寺澤拓海)
参加人数	日本語教師10（大学3，日本語学校4，その他1，個人教授2） 学部学生1 大学職員1	日本語教師7（大学2，日本語学校3，養成講座1，個人教授1） 学部学生1 その他 1（マスコミ関係者）

ワークショップは両回とも前半は講演、後半は実技演習であった。参加者にはワークショップ受講後に簡単なアンケート調査に協力していただいた。

4.1 ワークショップ当日の活動と参加者の反応

4.1.1 茶道

ワークショップ前半は福田氏の講演であった。講演は、「茶道」の興隆のかげに消えて行った「茶の湯」とは何だったのかというところから始まった。そして、「茶道」は江戸時代後期に生

まれた“修練のための伝統文化”，かたや「茶の湯」は千利休が完成した“自己表現のための芸術”という質的な違いを示し、現代社会における茶の湯思想導入の必要性を説かれた。現代社会の特に若者が持つ不安と閉塞感から抜け出すにはどうしたらよいか。歴史を振り返った時、混沌とした戦国社会の中で豊かな世界を創造し自己表現を実現した「茶の湯」を一つのモデルとして、個性と平和の創造への道を追求していくことができるのではないかという結論であった。

後半の実技演習では、まず福田氏による藪之内流茶道の点前から始まり、福田氏持参のお道具の解説も拝聴した。参加者がお菓子とお茶をいただきながら自由討論（会話）の形で質疑応答が進んだ。茶室という、ひざとひざを突き合わせる空間の中で参加者同士の距離感も縮まり、和気藹々と本音の意見も出やすい雰囲気になった。

そこで参加者から出てきた意見の中には、茶道のような文化活動を指導できる教師が少ないため、できる教師に負担が集中するという実際的な問題もあった。また、茶道と日本語の練習とをどう関係づけたらよいかという悩みの発言もあったが、福田氏は「こうやって、みんなが近くに寄り集まっている話そうというのが茶道なのだから、気楽に話をしようという場を作ればよいのではないですか。その時におなかがすいたからお菓子を食べようか、のどが渇くからお茶でも飲もうか、それでいいじゃないですか」というふうにアドバイスをくださった。

ワークショップ後の参加者からの感想には、「日本文化を日常的なもの、日常生活の中に取り入れられることとして教え、その理解を深められるヒントを多くいただきました。この見方を中心にして日本文化の様々な特徴について説明すれば、より学生にとって理解しやすくなるのではないかと思います」（ノンネイティブの日本語教師）、「自己満足、自己表現というキーワードについて多くを考えさせられました」と言った内容のものがあり、福田氏の伝えようとした「茶の湯」の思想が参加者に伝わっていたことが確認できた。

4.1.2 能楽

ワークショップ前半は、上田氏による“「今を生きる」演者から、皆様へのメッセージ：先人との対話を通して「誠実」とは何かを考える”と題した講演であった。ここでは「先人との対話」「心の成長」、「空間の充実」「伝統の継承」と言いたいいくつかのキーコンセプトについての解説がなされ、現代における能の存在意義を、「能とは、その根幹にある命を考えるというテーマを理解し、今は亡き作者と対話することで、その人間性を養い心の成長を促すもの。本来持つべき自信に裏打ちされた控え目さ、謙虚な心、を取り戻し、自分という核をもったうえで他人を思いやり尊重することを能を通して再確認し思い出す」というところにあると結論づけられた。

ワークショップ後半は、上田氏の地謡に寺澤拓海さんの仕舞の実演から始まり、能面や衣装、姿勢、すり足、声出し、謡（高砂）の実践と盛りだくさんのプログラムを体験した。ワークショップそのものが能楽師・上田宜照の舞台を見ているようでもあり、大変印象に残るものであった。

参加者からの感想からは、「短期の学生は伝統文化に関して興味関心が高いのでぜひ紹介したい。その時に自分の体験を話せるのはとても楽しみだ。外国人は観るだけでなく体験したいという欲求が強いので、気軽に体験できるスペースが充実すればよいと思う」「興味はあったが、断片的な知識しか持ってこなかった気がします。能の見方が変わりました。もう少し学んでから見方を伝えられるようにしたいと思います」のように、参加者がワークショップを通して、何か一段、知識を深めた経験を得たことが伺えた。

4.2 ワークショップ参加者に対するアンケート調査の結果

日本語教育の現場において文化はどのように授業内容やイベントとして扱われているか、また、日本語教師の意識として、どんな文化を教えたいと思っているかを確認するため、ワークショップの参加者に簡単なアンケート調査を行った。以下にその結果を示す。

	第1回：茶道	第2回：能楽
アンケート回答回収件数	10件	9件
勤務先／在学中の教育機関に日本文化に特化した授業はありますか	ある（1）	ある（1）
日本語の授業の中で、書道や折り紙などを教えていますか	教えている（2） ・聴解／読解のテーマとして ・年中行事，お茶，浴衣体験	教えている（3） ・筆ペンで漢字を書く
イベントとして日本文化体験活動をしていますか	している（5） ・七夕 ・遠足 ・茶道 ・節分 ・書道 ・和室 ・着付け（浴衣）	している（4） ・遠足 ・能楽鑑賞 ・母国の文化を紹介する ・節分 ・浴衣
日本語学習者に言語以外のどんなことを学ばせたいですか（複数回答）	自然(4) 地理(3) 歴史(6) 生活習慣(8) 伝統文化(6) 伝統行事(5) 地方文化(2) 文学(2) 企業文化(2) 精神主義(0) 全体主義(0) 無常観(1) 伝統的な衣食住(2) サブカルチャー(0) マンガ・アニメ(1) ファッション(2) ゆるキャラ(0) 邦楽(伝統的なもの)(1) 邦楽(現代のもの)(1) オタク文化(1)	自然(1) 地理(3) 歴史(3) 生活習慣(7) 伝統文化(7) 伝統行事(6) 地方文化(3) 文学(5) 企業文化(1) 精神主義(1) 全体主義(0) 無常観(1) 伝統的な衣食住(1) サブカルチャー(1) マンガ・アニメ(4) ファッション(2) ゆるキャラ(1) 邦楽(伝統的なもの)(2) 邦楽(現代のもの)(1) オタク文化(1)

調査対象者数が少数なので、日本語教育全体の傾向が分かるというほどではないが、それでもこの調査結果から、半数以上の日本語教育機関で文化を教えること、あるいは文化体験の取り組みがなされているということである。取り組み方としては、季節の行事にちなんだ楽しいイベント程度が多いようである。

日本語教師自身がどんな種類の文化を教えたい／教えるべきだと思っているか、複数回答で答えてもらったところ、実に多岐にわたる回答状況となった。もともと文化に興味・関心があるワークショップ参加者からの回答だから当然に結果ともいえると思うが、それでも、日本語教師の「文化を教えたい」「文化を教えなければ」という意識の強さがうかがえる。ただ、現実には、「今教えている日本語の授業と茶道の指導をどう折り合いをつけたらよいか分からない」「華道の師範だが、華道は材料費がかかるので実現できない」「自分が日本人なのに、歴史も文化も知らない」という問題があると自由記述形式のコメント欄に「悩み」が記されてあった。

日本語教師の本分は長らく「言語としての日本語を教えること」とイメージされてきており、学部、大学院、養成講座での教師養成プログラムも言語領域（言語学、応用言語学、日本語教育

学など)に重きが置かれている。よって、文化に関しては、その人の趣味でもないかぎり「文化を教える」ための知識、素養、技術を得るための努力はしていない普通であろう。本稿の筆者にしてもその点は同じである。それゆえ、「知らないことは教えられない」というコンプレックスを抱えて「文化」の壁につきあたっているというのが、私達日本語教師の現状と言えるだろう。それならば、日本語教師こそが福田氏のいうところの「茶の湯の思想」から学び、今抱えているコンプレックスから自由になって、文化を教えたい自分を表現し、新しい文化学習プログラムを創造していけばいいのではないだろうか。

5 まとめ

文化の専門家でない日本語教師に日本の文化は教えられない——このコンプレックスに長らく支配されて、私達日本語教師は日本の文化、特に伝統的な文化所産を「敬して遠ざけ」てきたと思う。「私自身ができないから」「私自身が興味をもっていないから」という日本語教師自身の苦手意識もあれば、「若い学習者には伝統文化よりもポップカルチャーのほうが受ける」という先入観もあり、それに加えて時間、設備、材料・道具等、現実的な制約もあり、日本語教育の現場で文化の学習、あるいは文化体験学習への取り組みを深めていこうという流れにはなかなかなりにくい。甲南大学YiJプログラムでも長らく日本文化学習への取り組み方は表面的で、リクリエーション的な要素の強いものであったし、私達日本語教師の文化学習や異文化理解ということの意義に関する意識も表面的なものでしかなかったと今更ながら反省する。

現在、YiJプログラムでは文化体験活動の種類を増やし、年々活動内容の改善もして、よりよい文化体験学習プログラムの機会を学習者に与えようとしている。「文化の日」活動(紙芝居鑑賞・墨絵・切り絵・伝承遊び・茶道・食文化等の体験)と現代短歌創作ワークショップ、年賀状作り、書初めがそれである。そのほか、留学生には甲南大学の部活動に参加するチャンスもあり、グローバル茶道部、和太鼓サークル、弓道部、柔道部、合気道部など、伝統的な文化や武道系の部が人気がある。この状況から次に目指すのは、日本文化の深層に潜む本質を理解しようとする体験プログラムの開発と実践である。

本研究は今後、文化の継承者と学習者が触れ合い、学習者がよりよく深く日本文化を知り理解する体験学習プログラムの開発を目指そうとしている。生きた継承者と出会い、学習者が自分の身体を使ってみて、感じ、学ぶということは、紙媒体の教科書を通して学べること以上にインパクトが強く内容的にも深まったものであるはずである。「今、自分がしている動作は昔々の人がしていた動作と同じものなのだなあ」というところから異文化理解へのプロセスが始まるのである。本研究が日本語教師として学習者に期待したいことは、もともとの興味・関心のあるなしはさておき、一期一会の継承者との出会いから自分の身体を通して多くを感じ、それについて考えてほしいということである。そのような文化体験の種類を数多く持ってほしいし、数多くの体験をもとに、日本文化、日本人の価値観、表現の自由、創造、平和の価値、生命の大切さなどを語れる日本語話者になってほしいと思う。

本研究はこれから、文化の継承者が日本語学習者に伝えたいと願う思いが学習者にストレートに伝わる体験学習の開発を目指す。異文化理解の究極の目的は平和な社会の創造にある。その目標設定のもと、学習者自らが日本文化の本質を発見し理解し、異文化も自分の文化もお互いに尊敬しあえるような日本語の使い手に成長してほしい。

謝辞

この研究にあたり、能楽師・上田宜照氏と茶道家・福田竹弑氏にインタビュー調査への協力や資料の提供、ワークショップ講師など多大な貢献をいただいたことを心より感謝したい。なお、この論文に含まれる内容や見解の誤りは言うまでもなくすべて本稿の筆者に帰することを記しておく。

(本研究は甲南大学総合研究所研究チームNo. 143「文化の継承と日本語教育」(代表トーマス・マック)として研究費の交付を受けたものである。)

参考文献

- [1] 国際交流基金, 海外の日本語教育の現状2012年度日本語教育機関調査より.くろしお出版, 2013.
- [2] 国際交流基金, 海外の日本語教育の現状2015年度日本語教育機関調査より.web 公開版 2016.
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf
- [3] National Standards in Foreign Language Education Project, “Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century”, American Council on the Teaching of Foreign Languages, 1999.
- [4]国際交流基金日本語国際センター,外国語学習スタンダード 日本語翻訳版(翻訳者: 聖田京子),web公開版, 2002.
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-1usa.pdf
- [5]岡まゆみ・筒井通雄・近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川智, コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら. くろしろ出版, 2009.
- [6]国際交流基金,まるごと 日本のことばと文化. 入門A1から中級2 B1まで, 三修社,2013~2017.